

栃木県現代詩人会の皆様へ

2010年12月5日
鹿沼市 小林守城

(挨拶)

このたび、栃木県現代詩人会に加えていただきまして、ありがとうございます。皆さんから学びながら、自分がこれだと思える詩を、人にも共感していただけるような、いのち煌めく詩を、親しい人たちに人生2～3篇は残せればいいなと思っています。人生二毛作になりますが、今のわたしは、ついに、「詩人になりたい」と本当に思うようになっています。遅れてきた復員文学青年です。ご指導ご交誼をよろしく願います。

(経歴)

私は、昭和19年(1944年)に鹿沼市内の上久我と言う山村に、農林業の家の7人兄弟の4男に生まれました。幼少年時代は文学的環境とはほど遠い家庭環境にあり、本などは何もありませんでしたし、読書とか詩と言う概念が心に入ってきたのは、中学校のころからでした。

いまは上久我から8キロばかり鹿沼の市街地に近い加園という里山地域に住んでいます。何になろうと、どこに住んでいようと自由な境遇だったのですが、結局わが人生66年、8キロばかり近代化・文化化したと言えそうな地理的位置・文化的位相に住んでいるということでしょうか。小中は鹿沼、高校は宇都宮、大学は東京、就職は鹿沼市役所というのが第一サイクルでした。40歳の時、1984年、県会議員の補欠選挙に出ることになってしまい、それから約20年の政治家生活をするようになりますが、公務員としてみれば、鹿沼市役所から県議会のある宇都宮へ、1990年、衆議院議員として国会のある東京に行き、衆議院4期13年余務めさせていただきまして、2003年の5期目の総選挙に小選挙区で森山真弓さんに敗れ、政治からの引退を決意し、その2年後に鹿沼市の教育長に就任し、一期四年勤めて退任したわけです。これが第二サイクルと言うことになります。学業も職業も居住地も自由に選択出来る境遇にあったのですが、結果は・・・鹿沼=宇都宮=東京=鹿沼・・・を二回廻ったことになります。

私にとって問題は、このサイクルを余儀なくさせた遠心力と回帰力、或いは憧れと愛着は何かということです。そこに私は、私の詩と、いのちの母と、夢や未来があったのではないかと思っています。したがっていまの私のテーマは、環境問題ばかりでなく、人間の文化的生命的再生の観点から“里山イ

ニシアティブ” が提唱されていますが、それを現代詩という言語表現の形式を使ってどう構想し、イメージ化していくかということではないかと思っています。

(筆名)

本名は小林守ですが、かつて政治家であった時には「小林まもる」の候補者名を使ってきたその延長で、挨拶文や詩文などを出す時には、「守」をひらがなで表記することが多くなりました。しかし、現役を退き第二の人生を構想するに当たり、幼名とも思える私の名前ではどうもしっくりしませんので、その下に「城」を付け加えて、守城（しゅじょう）と名乗ろうと考えました。まあ少し恰好をつけるだけで、どうでもいいことかも知れませんが、「詩人」を目指すという、人生二毛作に取り組む決意を示したいと思ったわけです。守るべきその城は、これから言葉で作りに上げていくものだと思っています。守るべき城を伝えるべき城を、言語にて強く美しく造形できた時、私は詩人になったと思うのです。

辻邦生の「西行花伝」には、西行の言葉についての考え方が記されています。「衆生を救う大地は、まず、言葉によってつくられる。虚空の中に言葉でしっかりした大地をつくること。」また、道元は正法眼蔵のなかで「愛語よく廻天の力あるべきを学すべきなり」と書いてるそうです。これらは政治家だった時代にも秘かに、私が座右の銘にしていた言葉です。

(一行の詩があれば私は生きられる)

誰が言った言葉なのかはわかりませんが、人生の岐路に立っているとき、感性や思想の危機にあるとき、一行の詩が私を支え、エネルギーを与えてくれたものです。中途半端な恋に自滅し、東京教育大学の筑波移転反対闘争・全共闘運動に挫折し、大学5年目の時、いよいよ職に就かねばなくなりました。まず、栃木県の高校教職試験に失敗し、民間では唯一つ、思潮社の採用に応募してみました。すでに一人決まってしまったということで、これもダメ。ぐずぐずしていた時、親に迫られて郷里の鹿沼市役所の試験を受け、それに通って就職することになりましたが、そのころから、私が座右の銘としていた言葉です。ようやく大学を卒業し（1969年5月30日）その頃は「人間、なんとか生きてればいいさ」という失意と自虐の底に打ちひしがれていたことが想い出されます。事務机の透明なデスクマットの下に、感動の詩文の書きとりを挟んでおき、時折覗きこんでは温もりと励ましをいただき、高揚した感性のなか

で平凡な時間にアクセントをつけていたのだとも言えます。

そのいくつかをあげてみます。雪に関しての詩句についての引きだしには、いまこんな言葉の紙片が入っています。

* 生死しとうじの中の雪降りしきる 山頭火

* あわ雪の中に顛たちたる三千大千世界みちおほほ またその中に沫雪もわゆきぞ降る 良寛

* まことひとびと縈もよむるは 青き Gossan 銅の脈

わが求むるはまことのことば 雨の中なる 真言なり 宮澤賢治

(本文は「雨の中」ですが、畏れ多くも私は「雪の中」にしたいと思っています。)

* ボロもんぺすきかと問えば好きだよと

笑いし母の通夜に雪ふる 船村徹

市役所職員時代は、詩文を秘かに連れ立ちながら、それでも学生運動の私なりの総括の中から這い出て、公務労働にまじめに取り組んできたと思います。組合運動（自治労運動）にかかわったのもその流れであり、それが四十歳の時、政治家になる道を開いてしまったのですが。仕事の中では、特に当時大変難しく厳しかった同和教育の担当を自ら希望して取り組んだ五年間は思想的にも勉強し、寝食を忘れて仕事に取り組んだことが思い出されます。そして、政治家引退後の教育長の四年間だったと思います。公務労働十九年余の中では、教育行政が私のはまり役だったのではないかと振り返っています

四十歳になったら自分の詩集を出したいと思って秘かにまとめてきた詩文があります。しかし、ちょうどその時に、県会議員に立つことになり、資金を使い果たしてしまい結局、五十四歳の時（1999年）まで延期になってしまいました。

「炎のエスキース 29」は公務員生活の中で、29歳の時にまとめた私の詩の下絵であり「続 炎のエスキース 25」は、政治家生活の中で、54歳の時までのものを追加したものであります。その中から詩と政治にかかわる私の構図を示した下絵の引き出しを開けてみます。

- * 汗と埃でざらついた夕日を浴び
 青写真を握った政治家の銅像が立っている
 死後まで裁かれる人のように
 頭髪から額まで青褪めて光っている （「炎のエスキース 29」より）

- * 私がもう一つの名刺をつくるとしたら
 「詩人」という肩書を小さく入れたい
 だがあの高潔な詩人の名刺には肩書きはなく
 名前すら入っていなかった （「炎のエスキース 29」より）

- * 見る者と演ずる者
 席を分かったその時から
 見る者の席の背後に不在の席ができる
 演ずる者はその時から不能を背負う （「炎のエスキース 29」より）

- * 一つひとつは廃棄物言語だが
 新しい関係の中に配列されて光りだす
 政治家の言葉がほしい
 人間を深く励ますその人の生きざま （「続 炎のエスキース 25」より）

- * 身近な者への愛の証だけが
 それぞれの死者の理由であった
 だからなんびとも戦没者追悼の席にあって
 美しい嘘をついてはならぬ （「続 炎のエスキース 25」より）

- * イルカは水中のものより
 空中のほうがよく見えているという
 肺呼吸しながら海に生きる進化
 イルカのような二律背反を生きよ （「続 炎のエスキース 25」より）

- * いつでもただの市民に帰る覚悟
 議員のたたかいと
 ただの市民のたたかいの重さが
 常に匹敵していますように （「続 炎のエスキース 25」より）

54歳の時（1999年7月）詩文集を発行しました。民主党の現職の衆議院議員でしたので、本の表題は「詩のある政治」ということになりました。議員活動や政治に直接言及するものは除いて、それまで書き留めてきた若い時の詩文と随想をまとめてみたものです。いま読み返すと恥ずかしくなるようなところや気負いがありますが、仕方ありません。それも私なのですから。

学生のころから読んできた詩人には、宮澤賢治・吉本隆明・谷川雁・石原吉郎・鮎川信夫・黒田三郎・吉野弘などがすぐに浮かんできます。もちろん現代詩文庫（思潮社）をよく買って読んでいました。

（今後）

現在は「里山イニシアティブ」の詩の方向を考え、書いていきたいと思えますので、鹿沼ゆかりの大先輩でもある詩人・科学思想家、高内壮介や版画家・詩人、川上澄生、歌人の半田良平や江連白潮、俳句では石山寅吉、加藤洋、六角文夫、そして児童文学の千葉省三、猪野省三などを再発見するように読んでいます。（そのほかいるはずですが不勉強でまだよくわからない。）それぞれの凄さに打ちのめされるとともに深く共感し、敬意を抱いているところです。現役のノンフィクション作家・評論家、柳田邦男も鹿沼出身です。

これらの鹿沼ゆかりの大先輩が同定してきたもの、根源的な生への風土的な感性に、私は秘かに共感しています。読んでいて思い当たり強く響いてくるのです。大先輩が今もそこで生きて話しているような思いに駆られてきます。本当にありがたいものです。私はそれらを学び引き継いで、私なりの方向で少しでも広げ発展させられればと思っています。

同じことを「栃木県現代詩年鑑2010」を読んで感じました。栃木県人の持っている風土性でしょうか。本県ゆかりの日本現代詩人・山本十四尾氏にも歴史風土的な感性のつながりを強く感じています。

これからできるだけ近いうちに、第一詩集を出したいと思っています。今度は「詩のある政治」の続きではありません。そして当然「政治のある詩」でもありません。「いのちの再生」を祈るような詩が書ければと思っています。構えずに感傷と癒しの詩も書きたいと思いますが、本命は少なくとも私の人生においては、「思想のある詩」は避けられないものと思っています。はたしてその一筋の思想があるとすれば、詩の言葉になってくるのかどうか。これからのたたかいです。本当に遅ればせの復員文学青年ですが、残された時間挑戦してみようと思います。